光清
新話
多滿字尽書
初編

萬寶全[illegible]
第三百四号
まと[illegible]
[illegible]書林
賣買所
心斎橋筋淡路町南ヘ入

へ 13
3226
1

# 序言

五雑組に論じある月の説とりよみ
あそびがら此書のお題は玉兎と名付まゐらし
雨隠れの月ぞや桂の林の中にあらん国に種
有まゝ流も字名の筆硯の水はまき[illegible]
とよむかの自賛の作意をきくにあるし[illegible]
中ヶ政五ろの貞子郎か孝の乙なはまれ

門 へ 13
號 3226
巻 1

ちまたの因果の報よりて夜な夜な通ひし堤
の濡ごとつゞくむかし話に綾瀬川の流れ
様な似たるあらましを作り出せしはあらぬ浮世の人
情をうつせし一篇の光寿斎が作にて其身
乃すさみに看る因果の怪談すゞろなる
うき寄せたる唄女の三味線まじりて
婦女の世界つまびらか柳橋と

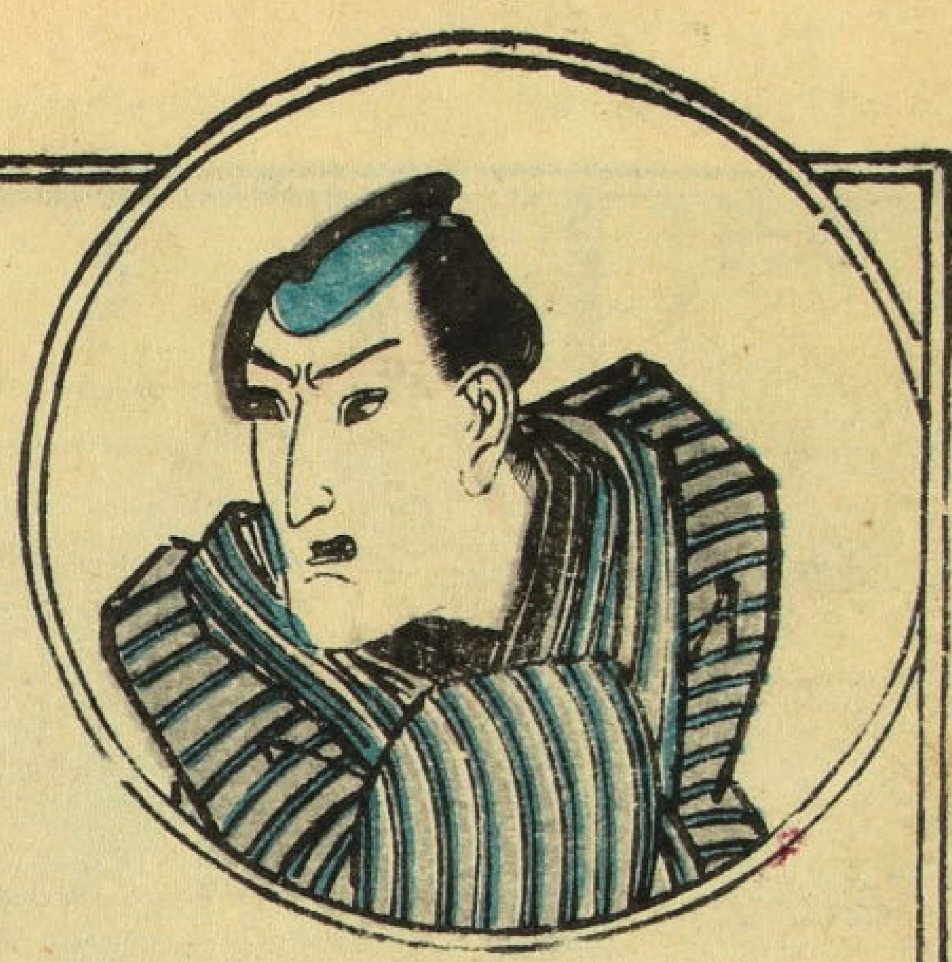
夕に揚ぐる花火の影も川風に音なふ舟の上に
漕ぐ首尾の松の梢を見やりて
水棹を建し女の達引に出合が
淀の四つ手網の岸をかへりみ
深川まで流れ来て
末の奇遇鳴るまで
子供の人情世態綴り続けて歎息せん

せかしく恋の道てをやいてゆまをいふ苦楽
しく情人たるうつくしきあつ度ハ貞さ官身に
まくて為てへ迷路のはまへくもきう
みへてうへ
東都人情本の作者の元祖
金龍山人狂訓亭
為永春水 書

掛川で
光濤新語玉宇佐喜
一名曰
○延命寺前
太田屋の後家
お里が娘
紙細工女人形を
三味線の音に
芝居と噺の評判に
○於米が亡魂

不忠好色の極悪人明主の
慈心によつて追放せらるまで
弥不善をなしの白徒
○金沢屋の番頭平八
鎌倉延命寺前
金沢屋福兵衛が家の

○婢女於玉
忠と操の正しき
巻中第一乃美人
○丁稚長松



都路の手鑑に
暗記其順を
覚えてあれバ容易
ゆまね道中双六
乞目が出て早速に

ゆくと思へバ
泊りかさねて
折角他人より
先になりても
関の戸の手形
とりはすれ亦もり
出して帰るあり
思ひ大津も過ては
あそび餘りだる
悔みの中に後より追
ぬく終処の幸ひ上りは
いよりて勧善懲悪の自然と
備はると知るべし

[illegible]新話 玉兎壹の巻 一名曰 [illegible]

江戸 狂訓亭主人著

第一回

[illegible]

十四五才の[illegible]

三十八九才の男と二人つ[illegible]

[illegible]

男「りんに此方へ寄てる程こちがまりの　桑「アてうちんをわすれて
来ましたようて逢へ　男「そうよそしくあつちの宅へ此男小細工
てうちんを置しろけりの紙そして今夜へどうするおもふ
方へとめるる宅へ行ろ　桑「どうせうね　男「御楽　あんと言て　桑「姥の
湖おまかく帰り道へとおろざんのかうへとまつてこと思ふくお帰で
来まつうよと出て来　男「そうじやア今夜ア御酒のかうへ帰るね
わしらの晩おかうのかうへとありま来て　おまへ逢てを行かう
[illegible]
桑「そうじやア今いけまで御逢へが逢ておくるとかうくで逢ふ所
りの紙　男「十二時まへ文へ又紙なア来ますとかうくも行よ
桑「気喜度久へ　男「志まてことせそりやアいがあいうの行世界も
宴喜多子出ますよ　桑「いやく　男「あぜ　桑「どうしてく云ふて人
ぞ、あるかまるりのつ子　男「でまろさまくれ出め　桑「いやくさ
るも新居ぐおかろさまてくとりくしくまよ　男「そうのもん
あくかまずあるこけ来かうの　桑「アくあう宴妻に出てよの
はまで今年きりしでと思ふかう此三十日子浄るり紙おも出

上手になりさうな筆じやアねへか　男「他人さへそう見へるけれど
そのくせね出来る事なら今にも名取をしてお師匠さんになるき
るよ　条「そんならお手紙をかゝないやうにさへすりやアいゝ。それよりかお
ちぎん　男「エ　条「アノウお宅へとつてしまへば親子の中でござ
ねへ　男「なぜ　条「なぜでもあつちの宅のお隣のおつ子さんが此頃
ね。私にいふにはお宅へと米町の親分さんと一同に歩行の紙名
とどうも親子の中でなるまいとさうサ　男「なぜお前は十文
此方は三十九じやアなし親子ぞくなへどならなしまへ八ナ　条「イヽエ私は
どうも紛れ筆のせへか一連に歩行のが気がつまりさうな
時があるヨ　男「十二ぐらいのときからしのとがなりのの色くらゐもして居なし
まいしうまみのなり　条「そまとくもさきぐしちアいゝなるめぞ
男「このころは何ぞそんなお手紙いひのぞトいひあつかふ　お条の新紙
見てすこし目のまはりが赤くなり端の鼻紙などに
男の新紙みるそばまでも夜の事をまで縁のつ人のてうちんと
萩商人の何かくしうかひに立会母と親子は恋にひとすじ
此方風や同気同志の縁たらくのわからぬ二人が歌をうたりいはゐる

人ぞとしられけるは麹町の岸屋伴二郎といふものゝその娘は
延命寺門前にて墨筆紙など商ふる吉田屋金右衛門
といふ人の後家おきくといふ者の一人子なりしが其身
はやく母親をはやく死去りて極貧となりけれども万事
母親の手にかゝりて思ひの外損のことありて続すゝめて娘紙売する
もおのれよ経世(?)ありけるがお菊は天性おとなしく殊に母親
に孝行ありて道のことなどよく心得しく人品よく容儀(?)も
自身は諸人を敬ひて他人の目のまへ愛(?)かりしがおくめの
十六の時より手親金右衛門の身分ありし伴二郎の信
切に世話致しくれけるものゝごとくいはれしとげはおくの
も信身のやうに思ひしにぞおほく是ほど縁をむすびにも
なりあへるもしく月日をすごし今年十六才の娘
つもりく定めけるはず中に浄るりの噂ぎん(?)女とおもむき
かねくも両国の世話大いにきゝをたのむべし財(?)のぐ
伴二郎も元分限者なれど押寄もあるべし娘のことも金
とて思ふまゝの世は身の上に嫁縁(?)しく壊(?)し変へそもそも

寒中修行して美音を

さてこきく彼お傘は半三郎さまの手銭もつてきし観世音をまゐらせく

まづは唄念仏お津の浄るり

中略ククキ
「おつまさんとあいずの若衆よりか種にも涙のうちをこへて泣きつも

かねてまちかねたんの出ぬおとこがあるのをまちかねてあつかふ

かれらは三人ことにあけくれそれぞれに思ひをくらし身の上にそこで参る

ておきたさうながらあとは市ソリヤそれぞれの涙ばかりに目をとぢての

義理のまたいのちもあはれにおもふさんがおなじ事と

のぞいてはこれのそれさん身のまへのおもひの涙を流すばかりなる

やどのとばいの念があつて一言でも縁をむすぶの

身さんがぞさうであろとうきやせぬいるのは此殿

てつきんせこまのかとまりとまりつくひとへ流の

始まりまする
合 一下略

傘
「ヨヤおとつぱん雨がやらく降くさんヨ
半
「ナニありもし

あへ「ト言葉の露も干ぬうちに軒端にあまる雨の音パラ／＼
傘
「是道御覧あれ音がするハ子
半
「ヨくつりんまよつて涙出しては

これじやア延命寺様へいかれまいおいらの宿がちかいから

むすこぶんのやうに遊びなさ 条「アヽそういはずとマア出してく
お出しなさんすもんだから悲しく降りくるから 半「ヨイ／＼承知だ
サア手紙を間がありとて尋ねてもしかしおまへさんなら出給ぞ 条「アヽ
よいヨいやうぐもお請出し卜手紙を引合せてもちいて見せに
お条が身がりの下駄の鼻緒紙継ぎ切て 条「アいいなア ヨヤ どう
ぶら鼻緒がきまってヨ 半「そうかいげ緒へ下駄しところ 台「ア
縫へ卜 すげよいヨ ちやうど鼻緒にするヨ 半「ナニ／＼おどしにするま
るのうすいるり雨もやむさうでございます一二町ほど近から

お婆さん 条「私がいや。こんな大きな紙縫しくれてのお
よりい 半「ナニ／＼そのものの紙でこしらへてやりし縫へなさい 条「それ
じやく他人がするものの紙 半「なにもいいじやあ下駄の
鼻緒がきまってくれるおまへさんをおかまへてこちらへくださるものの
か 条「私が無理をいふもんだよ 半「そこの事が情のこちへ何ぞ
さげでも立といけ縫へかく肩がすまないヨト中でこしらへて お条の
ままよ子せいの紙いで泣 条「若いもの縫へ立と紙をこちらへ顔へか
手紙をとりでこうかおまへさんがおまへのことはしれぬ情いの方へ

あるきくたびれたヨ 半「ヨイ〳〵。おぶさつてゆかうといふ方をみなけ。
そんな子恩(おん)をうけてうまれたともいふことサトいふ背中(せなか)へ
寿かりとよりそはせるおもてもうつむいたなり 粂「私(わたくし)が玄やうの
悪(わる)いのでその子恩(おん)にうけておぶさるとはがあるのその子勿躰(もつたい)ねへ
さぞ重(おも)からう子心(こゝろ)んじやアいやだヨ是(おもと)えへ〳〵 半「ま寐をそ
おまへさん母(おつかア)がお前(まへ)の夜着(よぎ)に紛(いき)やアしまへしそんな子寐紙(き)つけさせ
とのが。まアごそまたどんな老込(おいこみ)でへぜ 粂「そうじやアないヨ子おまへが心(こゝろ)なん
だ怪我(けが)をするといけねへから用心(ようじん)しないとはいへないとおいらさんがいふぜへ今の
半「そうかそんならいふから背中(せなか)でぐ今の後(あと)を聞(きか)んなナ
後(あと)をお聞(き)き 半「アノそれ「ゆふべのかはぐのがこわくなるとおもつて寝(しや)
ト云ふ」あそこの紙(かみ)の紙語(ことば)りがつい何(なん)でどこ(?) 粂「つまりなにをお
きゝ爺(おやぢ)さん。三文見(ねんねゑ)じやアあるまいし おまへの(?)このきみが半二(?)ながめるべし
十二三文見(ねんねゑ)でねへと他所(よそ)の三文見(ねんねゑ)さまよりこそいつた新門(しんもん)さく 半「
しかアそれでくは嫁(よめ)に行(いき)さるゝ他人(たにん)の家(いへ)へゆくとそんな(?)その指(ゆび)な文(ぶみ)さんや
母(おつかア)ゐたりながらしどうか「粂「箱文(はこぶみ)さんじやアないか爺(おやぢ)さん家(うち)で
お前(まへ)の女房(にようばう)やさしい亭主(ていし)にで添(そへ)く恋(こひ)しかつたく母(おつかア)の宅(うち)へ

逃げて帰りはしないはずの事だが 半「そりやアお粂ハ亭主に有
そうだうするトいひながら立ちよつてお粂が肩の紐へ髪結横に押
付けおつてゐる 半「コレサお粂どうナゼ返事をしねへ縁アあつてもそうだ
粂「イヱそうぢやアないが私がおそく生きてこの悲しいものゝ縁ト
わつと泣く半二郎も共にしよくらしく振りもなくおくゐの
顔を見んとして居る時お粂も背中から半二郎の横白顔覗いて
涙ぐみこがれ 半「ヲヤく此の子は泣く 粂「そりやアでもなく私が遠くなつて
悔しいものゝ縁 半「ナニサ……

毒このごろは私が身のなかあゝ人もまるくおさまらうそうな
ものだがどうしよう是非なく此の是非とも門を勝手にすれバ私がそしる
どうしたものだらうこの縁 半「男を男がよくして筈が嘉けりやア
今までは好いて来た事をとうとう 粂「どうしようかつて 半「どうして
嫌だといふてヤサ 粂「ヲヤくいやもお前と一所に嫌なものゝ縁「それやア
そうだけれど男ハ嫌なものかいなどうもしやうがあるまいせ 粂「まあなく
も私が嫌かつて附合するとお前が新しく身の代やらくあぢな
ことをおくさまの御心ままとに望むなりあるヨアノそれまでかゝ

宅で母人と帰るよりも延べし母人と帰るのがよいのしまで 廿三

なとまあて御手 半「ムウ」条「私がツレあるさんと このおちさんとの文、やはり二つが女同の子殺さしくりあり

ものころそて添所で帰るツけ子 半「今」条「あの御方ん衆え様で帰し

身川 半「なぜ」条「私も安う楽になしくとあり この御母さん

と帰りしくつかるにあるへくグウリしくとのびき話ものの帰りてお

妻がひとく化物の噂し談して守せるとおのむく二言三言なり

あやく嫁のくお気のからじやうるいか 半「そうぢッけるの堪忍をしてあ

そのかりな命の数へ穀ぞかし報くおそなるヨ 条「無分別ら之 半「ム」条「頼

御辰笑ゑかう帰るヨ 半「そう思ふ者のいつそ殺しやア 条「そうさても

お身へか不思議救命丸ぞの寿重丸ぞおのませざろうこのごろ

ドウヤア申するよくなつてその秋 半「此子がまとまる産をする為の

事は愛く落手せソレ身をも子すそ 条「アレこれはヨむうかしらある

堪忍しくおく主 ト尻手あ衆を付て質主殺しの関係の報

遂げこともあらぬ二人が相惚とらかつめるぐく縁切てうきのならぬ

子ごちの嬉しさ面子やとしいと思ふ男も元来の胸の顔がね

無分別かる報ひを悪縁とも因果同志とも云ふべき事なり

小唄とはいひながら異見の心に作りし音締唄にて思
案の糸口は外ならぬ寒月も流れ浮名の川竹の行末と人の
うへをそれとお粂と半二郎が苦労の種紙ゝ続くなりもあまさ
まうしは彼方やどる夜半の月影ら同せし横川にまだ東
隅田川堤の柳のかげなどとお半に縁ある物がたりお盃替
に半二郎門口ちかく帰り来たり

第二回

去程に半二郎が妻なりけるお伊代は夫の留守の間にはやく童
なる用事の出来しか宵より門へ出て居て待わびけるが夫の
方より帰り来りし半二郎下駄はお伊代も出合て「ヲヤお帰りか
先刻からモウく待わびて幾度か外へ出て遠くへ見てゐたし
しまゐはヨトいひながら半二郎の背中にかゝへし子を抱とりて「
ヨヤくこの小児がまあよくさあ能寝入しく肩さへさきにのるわしく
ゐやくやまく気でも落おへ粂をかまつくも寅緒が切きる毒ほす
なるものゝ縁組によかさねゝとお伊代の縁下少し毒の毒
そうなる事も道理お伊代ハ力んで「余りろ拙んで気をいらつしやる

高のうそゝく傘さして着物が高門へかゝり上の紋縫くるを
見て樋口かの郷入を引うけく直に巨燵へ這入んなやしく
座敷にかゝり「アイ否そふト奥へ行半二郎も中の間へ入りて
隣の羽折紋出しく箪笥メ出なぞら「何ぞ急な用でも出来
このう「十二郎じや有ぶ此者の世ーのをふつく是非今教
来てくださると急くにとーてう今ッうう足てく出で姉多門へ
行多門くふかうかいしそうまうまく大屋さ出が来て此る
待ち人の嫁入のてきぐ成ぞうりすきる下ず否う一市宿の幸左衛門

さんと仲間の兄が外まで人とかお出へとゆふ人生屋さ母の
玄関ねが行のごと大家さんの内義さんが二度まで呼に
お出でらう海り次中に上まをうといくら来るかど思うしわう熊
嫁多門も打捨て八右衛門ばかり八庄屋さ出へお出でうら一所
あつゝ八うきくそで行で隠居の森様老丈でも頼んで行がい。どうぞ
あゝ出へ此く八月が什付やゝうかへ八ことまかく森様状通はを起
酒の一盃も呑しまう「アイそ来て八いかかく八「おうアお条がう
此節気に成くちよのと行べ様むとこゝ行ういと来たきかの

お桑ハこころへ出して　〽桑　私や伯母さんと同志の約よ　〽どう
しても日中手を連て約が難しい不用心で今夜まで約らう
その時あるびあ　〽桑　そこまでもおまへさんが何処の約と私一人で　ありか
と幽霊化物が来るのの銭　〽半　〽アノ〱幽霊来るも逢見
ど化物や盗人は約束がしてありへ来ましし　〽ひよ　〽ヨホ〱　それに
おしいるのでそ　そんならば子モシお亀へが約して来る君お夜で待を呼
ぐ来てくおやりなさいてしやう　待りますよ　〽半　〽そそんならば門とも
早く約定へモウ戌刻るでむ　〽ひよ　〽アイト返事もせずしるく支

度設ての人家敷の人を急にやとうて供をつまらんとして出で
妙ばお桑が送りて出る門口女の子ども三四人十二三才より十　〽子ども　〽おくわ
さんお探びくあつ　とのとる設きして　〽半　〽ヲヤ〱　此処へお出でのお桑や
さん子探んでもいひすす丁度よい所へ今伯父さんがちよつと
約して来る処が立ちかへおくわと戸度してある　来ておくれさ　おくわやせる情なさ
宿へつまる約が先して戸拍子煎餅が何かにとり出して　そんなに
お参り　〽桑　〽アイ此のおかんで煎餅もえ　〽半　〽そして在平煎餅の
まうがよかろう

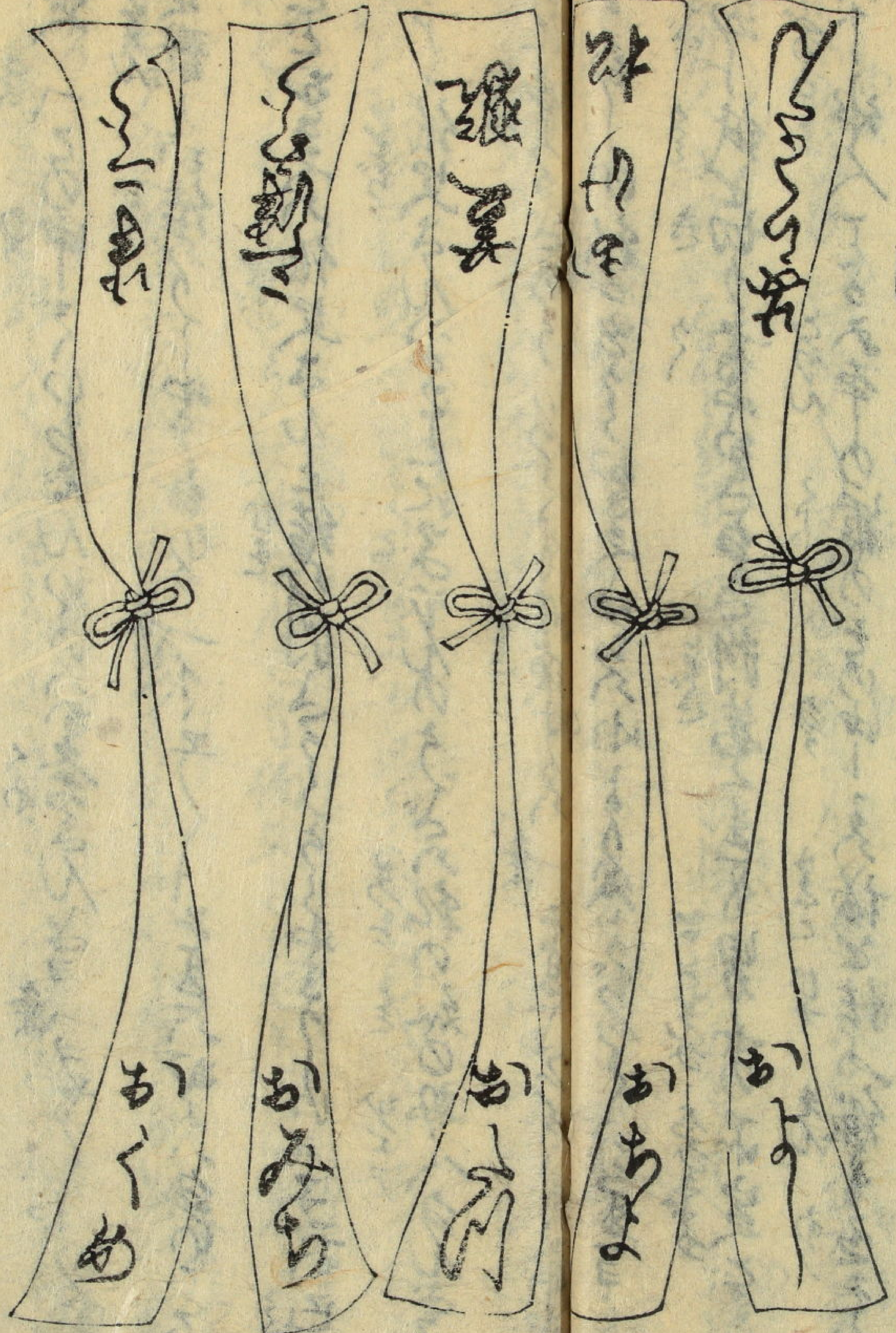
このおらんだ煎餅といふハ糀町三丁目名ある桔梗やといへる
菓子みせにて製したるおらんだ銅版の細画をつけたる
阿蘭陀煎餅なるが、此頃古今の御代の繁昌なる
いとめづらしきものにて只今よりはじまりて流行のものなり
条「はやくおかへりヨ 久「ヨイ〳〵 半「来年もまたまゐりてお手玉でも
とりやせうか、お辰さんもお巳さんも不残和合あそびなヨト羽折
掛立出る 半「お条や 条「アイ ト出て来る 半「こゝへ縫をかけてくれさ
きそくもおかさんがおまへが来てゐる時分 条「アイヨはやくおいで
お出なさいなアノ 半「今縫かけのまゝで来たがトんだ事をした夜業に仕上る女
のこはすハむやくしやうしく此処に来るが付だ半二郎ハいろ〳〵あれ
ちよつと抱付き 半「きさまつけなヨト出て行跡に子どもがさわぎ
に手玉とる辰巳ちやんがらまでおもしろく 辰「お条
さん合巻の中でハ正本製と田舎源氏が一番おもしろいねヱ 条「アノ
あんでも合巻ハ種彦のがおもしろいよ 巳「私ハ此頃出る中本の人情
本の方がおもしろいよ 条「ヨヤ そうかへ あれハ私
巳「エ 条「私の兄さんのハ大造笑本だよ 辰「アノ お条さん辰巳の

因果乃
情縁
半次郎と

巳〽イエ中の女房とお娘の様子までお互によく似てゐるよ
様子はよく似てゐるけれど信田の狐がありしはョ 辰〽オヤ結はうつしの様
男はさんざ言葉ご存じ 午〽そうしご田舎源氏の中にも光氏の髷や
髪の風ぐらゐなものある絵へアノ此頃私の好くゐる女の髪結さんが
左様お子不動結ふ私のお内儀さんが田舎源氏を側へ置て
この通りの風に結ふてまゐらしておきますとさそまゐらう
その髪結さんがそういふ〽モウ〳〵種彦との作者は頗る
田舎源氏もしだとかのいふ新年の着連くの髪結けはお普通
まだあるとのうく笑ひ〽その事だが馬ハまあとぶつて出来さ
ぬ〽余私の名前さんがそうおゐらん今じやア当月第一の浮世
絵かきでござ 辰〽種彦の作の中では今年の新板で諸国物語と
いふのが一番おもしろいと子 午〽ヲヤ私はまだ見ませんが買て
もしろかろう 巳〽お条さんお互へひとつの伯父さんの名前さんとお芸
で伯母さんの名は宮川ぞり伯母さんとおなじさ 辰〽ヲヤ〳〵お己
さんは陸まうあいて家をもゐる絵へお条さんは実のお師匠さんが死
でとふあやまりの伯父さんの名前さんとのあのぶつ延命寺

それは実の母さんが有るうへにこちらの伯母さんさへおおぜいさんと
大勢の人と結ふしいなへじょ。子丑お象さん　象「アヽそんなことおりる
何ぞしらくお接ひな
作者のやくすめくむすめの逢ふやつ。アイこのかべを「アヽ
とのをこまで大江戸縁の最判をまべがらくハなをぜス、この外
女の子どもが行衛がしれぬ…すいやあらしく…辰「けんに縁さんなが何ぞおしゃるいんでるこ
どもの中にて細いきん着あるよ　ちや「アヽ何でもいそそう色ごとも
まへ、お接ひな　巳「ヨヤく愛おお子さんどるへ　辰「そんな大そきく
とお役人さまにまでかくまるヨ　何故もしかの情にかへをしるくお接ひな
巳「そうまでのりう縁結び祭りにそうしやアありう　象「アヽそうまでよかろう
そうおしい私が出るまへにちへ小より此とのおさくあ…ヨト硯
紙を切り書やあきとき前篇へまでも男女の不定とまへおん
月下氷人ごと天帝の策のその中にて此縁を結ぶ縁もなぞくらね
…縁の糸引ていつまでも切ることなき深き…初めて結びし
中ハ幸ぐる楼がつく男女深くなるも有り外男女のかゝるくみ合
…実もあるなまで…情とあしぐひおあり…
こそ…母しは兄弟…象「サアく…結び合
しくおえト…辰「サアさなくお結びなお象さんおまえの…

私が結んで上げう 粂「アヽそうしておくれト手よりりぢん〳〵に
むすび終り 巳「サアむすんでおくれん 辰「ドレ私があげまして上げうト腕ぐ〳〵
に結んで残らずあげましてみし 笑ふ中よりすこしふぐ〳〵
ありその結びりしおりむすびへいふむす一ツづつしまひくぞだよ
志るしある鬮紙なるべし




おもしく笑ふその中にちまよ 千「まあく 私が是でヨく うれしい
もんぐく 撰扱も吟じやうの私のを何るヨ 久「まあく
ちやうさん 結びおしまいいたしてどうかしいのぞ一八子再度結び

とてものことに結ぶの神さまの子 私も此頃は安楽さん

と結ぶ日ョ 〽お亀ハよりくしやにきついこと安楽さんと結ぶ日

そうもよいョ 〽ヨホヽヽヽ夫ハ紙の衣装のお豆ぞ惣兵衛もよかろうか

辰〽この中では幸さんいくのハお亀さんだヨ 象〽ヨヤくお亀こそ

芝翫とお結びじやないのか 辰〽イヤヱもうそれはおまへがいゝのさ

まさかおまへ八百文さんと結ぶ日ハふたりやまアなが子正お巳さん

巳〽アヽ何文さんハほんに子がなんのうどん私の叔母ハみんなきつうぶん

みな通りあるぞうくのがくも結ぶなんぞハ 象〽そうさまアそれからお内ぢやくぞ何文さんと

縁が結ぶとのゝがおめのよの子 辰〽ヨヤそんなことを何文さんの

家ハおもじござ文が出ぞく主へが結ぶ日ぞのごろうかふおなかへ

ね。そしてかんとうハ節さんでも何文さんでもおいゝ元を他人

じやアなめの子ずいぶん色にはなくもよいじやアおのゝ 象〽私ア否

トおいまり恋ぞく記を主来のしくう日むきうんざして顔を

みなく辰くりしがことより仕出し江縁むすび三段まぞく食む

二本帝とむすびはまたおまけまでも今の子のしやと私の床へ

お辰をお巳智 天〽ヨヤ今戸ハ細妙さんハ何処知らぬとありておめでた子

之「アヽ十二物のかも無理な事だヨ　巳「噂をきけば細君さんが先刻出て
行時余処へも寄り子供と新ひとつの話　辰「それでも今じやア半さんとお条
さんとおまへ三人で子供とお条の顔を見たくなつたと　辰「サアそんなら
[illegible]お噂りでおのづから[illegible]の[illegible]○ゴヨン〳〵　一[illegible]子
ぎ[illegible]の音カチ〳〵カカチ　巳「ヨヤ〳〵宗吉親ゴヨ　条「マアよいじやアないか
爺さんの噂るまでく居てお子ぎんそしてもつとお顔をおみせな
之「モウ〳〵大そうなこつたョ今に細君さんがお帰りじやろうから火でも
[illegible]
トいへば〳〵なる娘の子お条も後から送り出「ハイさやうなら又あしたよ
其「お聞ヨト姉夫あけるりかけ縁を交く結ぶの縁むすび娘しおうぞ
幾度もいつまでもこういふ娘しき娘の子[illegible]後を見かへるそのしほ火
[illegible]おもつ立あがるも行あり別れ[illegible]
膝におがめく志ん〳〵もるそや[illegible]の半[illegible]の[illegible]
りん〳〵と[illegible]
「火の用心さつしやりませう

光濤新話
玉兎壹の巻 終

虎濤新話 玉兎二の巻 一名曰 あぞくへまきん

江戸 狂訓亭主人著

## 第三回

小夜ふけてくる鐘の声たゞや子刻を告れど未だ猿二郎ハ帰り来ざれバさへ独寝の彼ハ家の天井さえ荒果たる鼠飛ぶ鳶との臆病者の妓戸を鳴る風の音まで驚く心細さを鳥の声もてりこそ迷子を呼立る太鼓の音ドドドンチヤン〳〵迷子ヤアイ〳〵迷子の〳〵おせやアリイ〇ドドドンチヤン〳〵お家の内を

衿もとより冷なるあびる思ひなく火鉢の際に煮鉄あるかし
あぐら崩りしおそろしさ時におぼへしや顛倒の湯の末より隠く
とめえ坐ろりける青き火の障子へうつりまる烟にお象を
アツト絶つる思ひなどなく彼火を立消て色あをざめたる一人の
女声りくとしてよくおこめがそばへ間をさし寄りてちんがりとめの
おのれしげは座敷女へモシくお象さんモシさぞこはいとお思ひ
であらうが決してもう気へ仇をするのではなけれども騎鉄丈夫に
して私の中こゝろ見てけしくお象エお象さんトいへどもお象は
あらく手業する心地は返事もなく直にさらし
今はもあらく陰をとり一ひとりすらつくまる彼の姿すらしをあ
までくお象におもひ女やモシお象さんもしいへばお我ひとつあはれで
とゞまるまづく気まりましてどうぞ我身をそへさしてやる
ましトいひてころりと後は元の姿さんと湯の中でゆり
ましく怨をもしことよりさゞめくよみがへる去人に
綾瀬の月見にさそはれて声もその時上汐に音でのぼる隅
田川のながれの朝風にさまよへる浮人一夜の契根をも惑ち

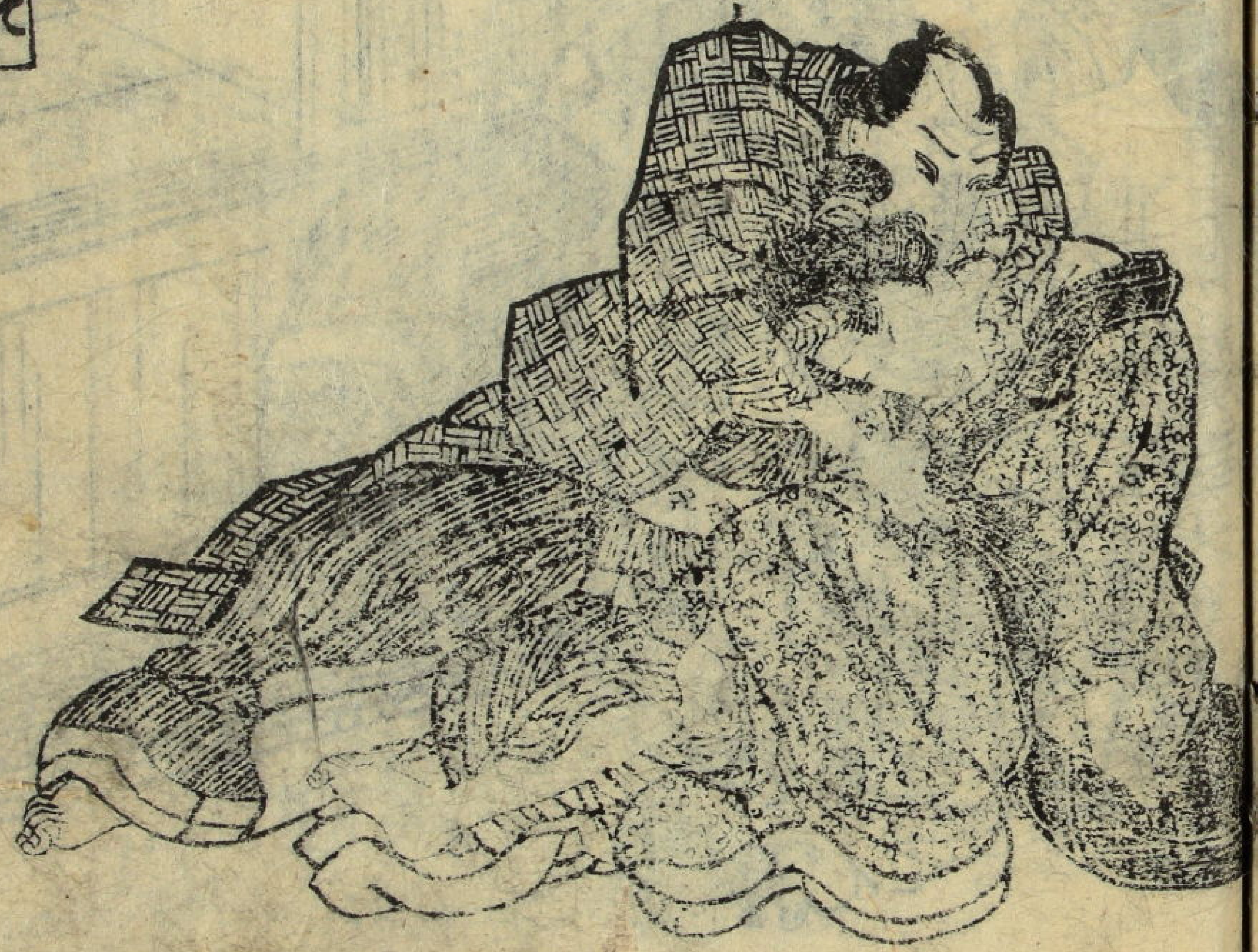
こぢんまりとこゝまでく頓道までもそろはい簀網かにも頼る
紫雲園の罪なれやう死骸まぐく当座に去まぐに去まつて御座
経も祖ゝ後は親兄弟の一人もあらねその弟しき同朋ひいきする
人あくまで川りしいともいかしいとも乎のまゝ亡骸をその
揚場やがしこの岸から沖へくしと突出さま寄る辺も定めぬ
うつまの三途川の若しき銭ともなる上もがもない路銭そまゝ
とも知らぬ半さんが南のまもりの四り屋敷の木戸へ投ぐ遠瀬
川辺てしが死骸ともござんしあくその紅路や新の人を僧つく

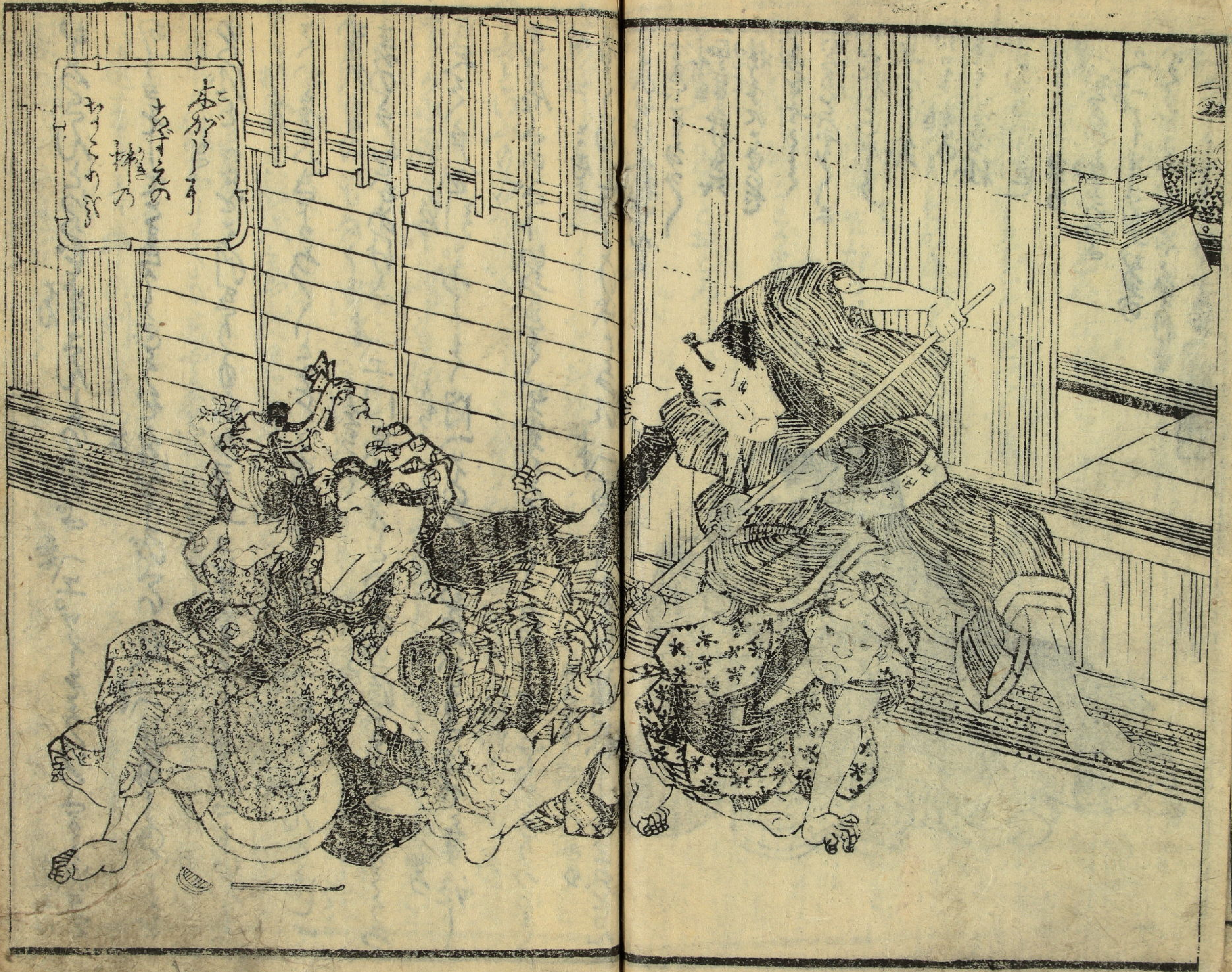
死骸をお寺へ埋め弔ひまでも懇切にかうおそらくまたかなしき
しき諦まぬく別まく居ても忘ぐしつきまもるひるの花の鳴
人の情よくく身の恥かくも取りがましとおなのの半さんの
やさしいお心と粋のと慈悲の情の如せもなくひとかたまに篤く
積数の貴賤この後うけまくもどうぞ一度添伏して為
しい念がたくしとこでまでくこでまく申すまでも有がた
ろしの縁だぞりそまあるもあへの髪かりく急取とげさいでに比ろ
報ひまゝこそまゝるぞ多く前世のやくそくでぞ半さんも南意せ

ひとしく世の中にも善は遠ひながら節々ゆかしい気に入
のいやりのがまゝ周縁ぼくお伊代さんとの内義さんの器量
かりでは賜りけるまで見まではお気がたまゐつゐでしが無理な道具
知の情ぞうぞかへくさんせとゆへどお条は返答も泣入ばかり
さる半兵衛生かるこそ久半三郎はおのれの外に手あるぞりとく
まうし隠すコ家の門何心なく覗けば家内はワアワトお条が
淫婦とまではとおどろき戸をこちあけ見ゐるひまもなしに一団の鬼
火の門…お条は一向正体もしらずまゐる半三へお条を

よびつけ又発せんと
すまじきことみちく
正気ほどばかりでは
積年にきせのぞ
為をそちこそく
おのおのべなくみ
ごたおとしぞうり
是そうこと見が
ハット気の
悲くおみが顔
其一家ほうき色
げなうちあぶ
「おのれや気がつき
之「アイはさん之おれの
おりそうかつかりあやうく川へ
「そうかえりやうかがる

（三まきめへつゞく）




木がらしや
こずえの
柿の
おちくわえ

おふぢさんと何がな半さんとやらで 粂「エヽツイそうしてさう〳〵縁遠

おしヨせ[illegible]こゝまでこいどうぞ客をよぶでは迚 半「法界をして[illegible]

めうだと客をまち[illegible]てあるヨ。エヽコレサ[illegible]このごとく[illegible]

そく粂八は[illegible]のくしと[illegible]紙を見んとす[illegible] 粂「おふぢさんが[illegible]して

表の戸をおしあけて 半「エヽ門ぐちへ[illegible]と[illegible]の庭で[illegible]するやうな[illegible]

ふたゝび戸をしめて内へはいり[illegible]何で半絶し

そく居たのごとく[illegible]粂八[illegible] 半二[illegible]

[illegible]首[illegible]紙[illegible] 半「去く[illegible]

このごとく云まぎらして[illegible]心に[illegible]川流[illegible]

の女と[illegible]の離れ[illegible]お米と称し町[illegible]

[illegible]んごと[illegible]も[illegible]と[illegible]

[illegible]のもの[illegible]消る陰火[illegible]今も[illegible]眼前[illegible]

[illegible]粂八が[illegible]見[illegible]何[illegible]お米に[illegible]の[illegible]

[illegible]と観[illegible]も云[illegible]実[illegible]のうの大の[illegible]も[illegible]

[illegible]遠[illegible]半の刻[illegible]ける 半「サア〳〵お粂が[illegible]大[illegible]

に[illegible]が[illegible]さ[illegible]伯母さんの[illegible]を

きつく寝るが火箸ぶ今はまあく来るヨ　条「私やアもう一晩でござ　条「
よござく伯母さんが宅に居る時でさへお良人と同席で寝たり　伯母
さんと寝たりするものゆゑ今宵はぎらく此のまゝで一人で寝
るのはお私不断おもいよそのそうぞヨ意地のわるい（二三）
いおらがさりいもののおもいくと寝てさうらろでござると思ってのことさ
きうら同くおと同席でお寝るて　条「よいヨ二三日も我慢
しく一人りで寝るヨ他の人くある所ではおふたり抱寝しなさる
これからもの紙一人でお寝るのをしんのとおやぢがぶらう伯母さんが
「お通りごとさういつて答るからさう思つてハお出トおつしやるか〳〵
猥立ど寝てハあらねわどけなき手枕の浮気姿一まくとみえてそ
年のゆかぬ是非お夫婦でも同じ々意の紙がゆきねまる紙の
女人形も浦田丸留門だし多くべく見てゐり社寝するを
見せてゐるうちおむきゝ見く寝なりも宅らしき手眼への人形
よろう縫ぞく着せてりし紐くの寝紙縫ずまま　半「サア寝ふる
熊ぐく寝んねし遊ぶそしそもろれ寝る人形が風邪ひくであらう
宮のおトいつもお粂も寝門でりまひ　条「よいヨ風をひかせへます

サアヨ娘ハおつくさんの胸中へたのしく濡をしかけうち出せ、ト懐へ
りまする 半「サア小児みたくもりはへ 粂「ナニりやぞとよりヨ 半「そんな分限が
懸想せし色を知るヨサアおのれが周りにりくらう 粂「そまとしやうちまつい
ろうトとりくかへう雪隠へゆきぎしたにきてり 粂「ヨヤ銭は余所へ
娘るの入口 半「そうかそんなうへ戸棚の前へ旅をば細引イ
ても出るも勧進帳へ 粂「エト びつくりし 銭ハやそヨおどりしてハ 半「なまし
見もちえへ上のおもしの首にサアく 茸を組へ遠めうく娘を出へ まつさ
御ハ指にてかくもすると縁義ぞトおまへさくお粂もりそく

と蒲団のうへ木様ながり 半「サアくおくらけさおつまヨ 寝所へ
寝へトあまえくある婆さんやうしきをその風情なんてまく 半「寒く
銭へまうす火鉢紙のまでく出るくおサアよし尋ねた扇紙うけるを 粂「お
まへ分まで娘るののく 半「娘るのサ今よく聞なくの言まりでして
ト甚紙をかきよせく出口の用心紙うでな 半「アヤしく先刻は
びつくりしたトいひながらおどり出てる扇紙茶の中 半「りり座前の
組をよく押付お風がそのりさる音の 粂「イエトりふとき雲気紙の
舐の音 「カアしく 粂「ア切ありしさ先刻ひとりで居くは

迷子みが大きく モウ〳〵二三日見えく〳〵ならなるつる編みがみ
そく居ましきそしく 迷子のおちんヤアリイとのつてかわりやア
嘘の名残りてこのよ話へ 半へなぜ 象へなぜとくも芸居じやア何る
まのしおちんヤアリイとのつてうろうサ 半へおちん長たら家つゞくあくツても
おちんとの事へいつてもあるハナ 象へモウ私やアノおちんの陰るの人
うてうものよけいる延津賀さんのおさるひの河嶋尾道さんと
義太夫さんがおちんの語つてのがまことにくしおもしろうろう
とうぞと聞くものをしたけまでとそものの半分も出来

るものハあらゆるものゝ中にすぐれしと称せるもことわり
丑満のころよりそうとハ女子ども色づく花の生娘がよのつねならね
恋ハしき風情なりし何と無う心わり気ざとりありも実ハ未来
が一念の名残評生なくもあるべき久しくかりね彼お生に久し
ありてく合ふ時ハ文字にすくも久しく来る家と今の字をよくまなるも
自然因果のことわりか君さも何かハ理のこと悟むこそハ身の上の
と心残いましめ眠らんとするまで我ふと行す名残只何とあくお出し
元ハ他人の此道楽とうしき縁でこのふうじまふ末の残なく志さるを

今般ハ何やしき恋のあまへずすることハおそろしき風情のあるも
義理あるも父ごさもあき前より朝夕に伊代も何とも思ひハせねど
と筆づゝひするほどとすぐしゆくるとまでもゆやしきことざなりこそとさうを
ぐハ初老の身逆き政業の中ハ前後外の思く前の事も時鳥
と見まへバ初花もまだ咲やらぬ織の未通女宵に語りし密夢の
その夜ハ思業の外浮名立ながも川かもかゝらぬ縁
瀬川月も桃と桜田の筆に残せし新かき事でまでも後瀬に枕
ど恋の余念やゝ小と半二郎心乱までく寐られける

## 第四回

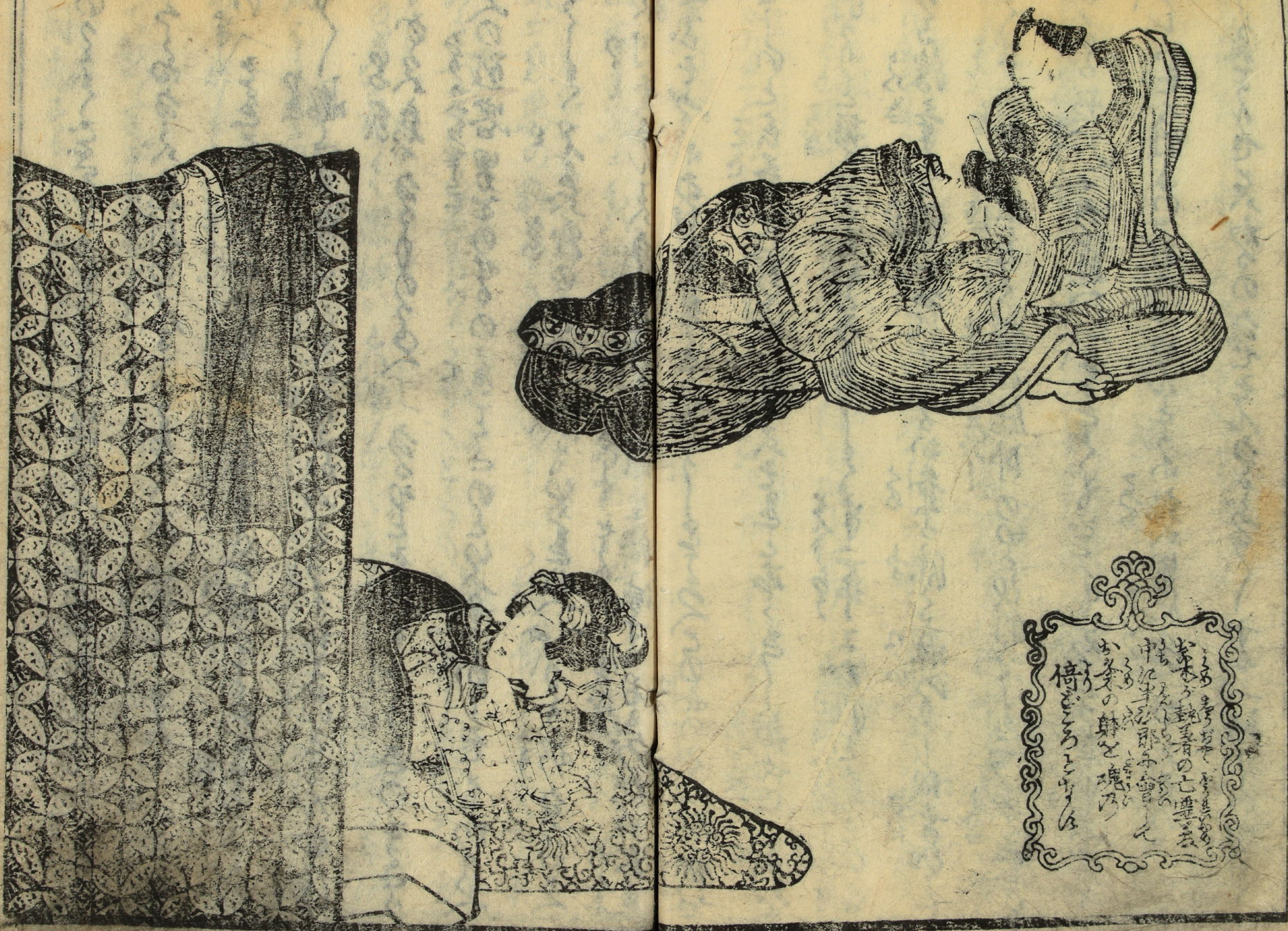
やうやう眠る半二郎が寐耳に聞ゆる女の泣声 アレエヽ
どうぞ助けてくださんせへ ヨウヽ アレエヽ 堪忍してくだんせな
まうしヨウヽ ○ふと目覚さし半二郎 のそより起あがりて跡ま
大丈夫の何ゆゑ女に情けなくいかんとかんと寝所をぬけ出でよく
きけバまさしく兄嫁の女の声さも気遣こそいけ助けて
やけんと起より兄嫁が部屋へ来たり寐ゝて見るその様子
半二郎ハ身づくろひ刺に棒取手に部門さげ戸を押開くて

一人の義理ある人まへ〳〵おとりなしてより歎きかなしむはすでに危き
其日そこ〳〵にて立帰るより半二郎人もの猶もいよ〳〵大事と右と
左の一家退けたる其のかみ手配りする飛脚もつ〳〵申しわけ
本心白状のことども〳〵委く語し委きと道もよく半二郎へ女に
扨それやら〳〵わかれ〳〵あるとあるへヤア何処の女中ぞ
知らせまして〳〵そのうへにこれ〳〵ありこれより遠くへまゐりそうけ
何処からも女「まあ〳〵モウ〳〵ちがふとぞんじましてあるいて参り
この難儀を助けまし「おのそのものの老人どうぞ命のあけまへ
まうしお座敷の隅へでもお通しなされてござりまして「父へ渡
次第でござりますゆゑ座敷のすみでちよつとでもいゝからおやへの宅ぞも
案じなさるうちより御心くやろうじやア様子へ女「御存切に
ありがたうお礼申しあげてござります今の宅へ半田とか申
知らぬ宅から大そう遠くございます女「エ半田とへそりやア大
変でござりますやア今ツからといふまでいよ〳〵そんなりやア此方へ
遠くはせんあいよ子お女への御亭主がやうましくいゝくまへし
見るの女「イヱマアどうぞ直ぐさまなんぞとおかのしてござりまする

一晩(ひとばん)おとめなされてくださいまし ト しらずうつむくハ詮(せん)かたなく家内(かない)に伴(ともな)ひ表(おもて)の戸(と)をさしかためゐろりの元(もと)に座(ざ)し 半へドレ〳〵マア火(ひ)にあたりなさいまし世話(せわ)さぞ寒(さむ)からうト火をかきたてよく〳〵見れバこの女年(とし)ころの田舎(ゐなか)にハまためづらしきうつくしさ 半へヤレ〳〵おまへハまだお若いやうす此(この)娘(むすめ)ごのおかミさんやら 三十(さんじう)ぐらゐの姿(すがた)とも見えず 二十一二の 女へハイ二十四でございますがかやうにござりまするゆゑ面目(めんぼく)ござりませぬ 半へそれハ堪忍(かんにん)して泊(とめ)てくださいそうまゝ何(なに)に

なくもなんへやうしどト いひながら見まハせバ見るかげもなくあさましき家内(うち)に人(ひと)ずまひなく半三郎(はんざぶらう)ハ寒(さむ)さもしのぎかねもしだん〳〵とそばへより 半へドレキニマア火(ひ)にあたろう お娘(ね)へさんへ ヲイお茶(ちゃ)やお酒(さけ)でも出(で)てもいゝうト いへどお気(き)にかけずそばのさわぎを夢(ゆめ)にも知(し)らぬ様(やう)子 女へやうあとりしお娘(むすめ)ごさんとおまへさんとお二人(ふたり)のおそばへそんでございますお軽(かる)はをいとしく気(き)の毒(どく)さうにござりまする 半へナニ〳〵さう言(い)ふ事(こと)であつたか 実(じつ)そんな色(いろ)わけのあるのじやア あまたハマア私(わたし)も角(かど)もとて〳〵お娘(ね)さんせへトのことより〳〵死生(しせい)の人(ひと)どもに命(いのち)を悲(ひ)しみのあげく

縁もさうぎしあらんとおもひしかどの元しけるが幸まさき
せうしとおもふそりを簾あるの端へひきよせて耿然気のどくらく
ちあふ恋せまるが彼女は浅からずし、円二郎の親を遠くかどをうる
まかりしおうぶ紙つのるく、やふしぎな出郷ゆくこの世の危い銭
助うりまして、また宅かおく、さらりしまして、その後にト蹄ハ流に
此どのある処の中に知まいらせども、縁にかくりまへし恋慕の情どうか
のみ寄ることもがなと、おもひ風情見えるかもうる門にまてきてしも
みるね仕義とよりしかんでみるかもなくく、はやくしえがき[illegible]の庭
お金がそぶりにあおがあるとかりそしさそるへこの女の[illegible]銭を
せとしいとあ家にむかど姿は大さまとあまし彼女の後を
門かりと縁まるども、あどあるもしく、円二郎にお門とあるをふ気
まかる浮雲も縁の名にてとぞうるお金が深く森のりし銭貴ひと
しらく円二郎が乳まそく俱に途中のせと切門まりしき一ツ家へ 女「
このまが馬丁よする捨へ 円「そまなくもどうも あなたおねへ 新茶かくる
女「アレサモう門まるヨ あの子かんさうに親男に逢ってこそよいヨ」円
そうろぞよりでこそがるのあぜそんなまぶるくする 女「嬉しいやうなく


お菊の身を
倚ところにせり

ことわりぐござんすれどもまたわかれの人ともの身の上一ツにまかせぬゆゑ一日に

逢ふもかなはぬ先刻の人子ござりますへ寝るさへ勇がよくわかるさ 女「ゆくら

しい 男「そのまことを実にぞろう 女「アレサそんな嘘いふな、おまへさんな

らく憎い男さんこそお目にかゝりてツイちよ門とこゝんな浮

き身のなり衰がなるもの是 男「なるほどもつともそうさのかくら

女の顔容男きのせるのなでなのとい女からおこもをもちぬめ

それしく身を程のこ津業さ是 女「ゆうからからん

かく門をはんて丸くとげとも羅生滑滅するあまつあの年恵

十三年ちかくのて除を追衣塊の 男「エそんなものも立てハ 女「アイ

お前が意悪の執念ぐ 男「何猿はありちや絶え、あつしやごうして花

ぞろう 女「サアその花もちりうせてこそくもお劔へあなたまがみらさ

さんの身ざかりく羅漢い、あゆり身ながらまゝをしの幽信切ま是の

系統そうさきまで今秋かつしくまゝなるこりはどうぞあきらめさ

と思ふしめく 男「ハテあしざまその詞そんなうなれた八ばなさ

お前でつてろうそまでござりしそくとの女の中生死の霊剣さうも

おく同床まるとこ人気をつのあやしうて執る狸の變化ト翁云く

寝ているを引かへしてその手を起んとするその手にすがり「ナレこれいな
何処へ帰らんとするぞ」「ヱヽ二瓶がト二四郎手にあまりて是を
お条と深森の姦かしく女の肉へ候めしとのあるものなきしか
極楽知らぬともしとよりふさふ計りせんへお条ある文を
どうせんとくあんじけるに酒息ぬつかく今さら後悔も盡
はくうと男の縁にほどすまぬ世の中の義理もいとふあかふ
あり難のう恥かしき乱さ姿のとり出くあれ「条」ヨヤ嘉兵衛
か顔の○ヱヱ○なんぞりるいとぶあるあろかんかんしくいかなる何が
涙にさらくこのごヱヱトおそろしあまどに変くましく
円二郎子奉そろく寒さしのぞくむらしさ
とき此時とあらば円二郎ハ菱田にお条を外の女と思
ひく枕を交しお条ハ世のとより円二郎が恋さし殺す跡
後もなく焼焦せるこゝろのあらまくありける処へお条
とふものゝ妹をかりたまはゞいかなき世の僧の法のりで
終に浄くハありしありきまゞこの後お条が風情を讀
まかすべ解しげさきにとあるべし其まゝハ何国ぞ事まで

或時(あるとき)ハお粂(くめ)まで或時(あるとき)ハお米(よね)なるが此家内(ときどころ)ハ何のかなる
ならることもありそのころからくよの〳〵也

粂「今(いま)おまへがいふくまで一番(いや)ふなりてさのへ。エ　米「ナニそうでも
稼(かせぎ)がおもくが心(こゝろ)ぐくどうも浙(すな)わちえへて致しことおもひくかんがへく
みるのだがおまへハそれを夫(しん)も世話無理(むり)を致しまた致ゆゑ
とふ思(おも)ふ也のう　粂「なぜそんなこと致お互(たがひ)のことへゆるいとおもひゐる
まつが同様(よふ)に寝(ね)ハまるでハ子エ　米「此方(こちら)ハ義(ぎ)で来てことを工　粂「エそん
なら寝(ね)ハ私とハ却(かへ)つて結(ね)とお互(たがひ)のへト云ながら道理(だうり)

米「こまつてう〳〵お粂がうなぜ世話のぐナニこまるさまざらしさ　粂「どう
あつことおもへどもうつりいつくまでもないとあてまつてぐ義(あね)ざさん
のとふ今(いま)さらにおまへハやめる事(き)におまかりくどうぞけまど私(よわき)ハどう
もこまつぎりにやめるもうまつ致心(こころ)なくいぶつらいハ此(この)ふうな
ことが傷(うり)母も出来(でき)ぬ之(の)因縁(いんぐわ)とゆくとゆきてわるくそうきめる
あり思(おも)いが同くおるまする也母人(おつかさん)ハ病身(びやうしん)なりおつかさんハ
さそやさ嬉(うれ)しんぐくそのりのないこをしがあ兄(を)ばかりをあらしに
しく実(じつ)の叔父(をぢ)さんとかりつく居(ね)てさんなところ兄嫁(あによめ)相(あい)が

後生なく婚縁なく〳〵なりましては家中お妻も信切に
思ひやらせ給ふ事なる思ひ切る事も出来ませねど親にも
まさるお妻の恩ある今の事なれどもかうしてはまゐらする只命の
ともすれば〳〵も捨てまゐらせしとおもひ込では私が一途〳〵ぞん
なる延命寺主の母御にお頼み申して剃髪いたす事などといふときに
お宿を門としてあまつさへ夢中半二郎はこまり顔なりしが 条その一室
と見へお妻の出家なりしかいはヨよろしく一人身ぐ事のみかヨ〳〵こまりおもひがりのに
何か彼が何かの身が死去の 半「さればさまでにかいものゝ 条「こしやくなて六蔵
いろ〳〵となくしくやかいなへ 半「申てい〳〵とてもかゝりての百
信まくさらくこまりて末が若労はどんなさぶらうらひ
条「あかがエ 半「何がといろく申の一日かおしまの代の目に付くせうか
あるしるて一生郎とのふ見けるいえもそもござ薬知して居る
身もがらも欲するどうぞ他人はその當分指もさせてくれるか
のは付方の性根のうら今ッのそれまでが事になるトいへばかくあまり
殺唄のの嫁入するの事をとる為身とおもへば半二郎の然誠
苦労も無理なことばとそのまゝ兼じてしまひましつた 条「そのまゝ

あるならこそうござりますとも私の手一ッで育てくれしと思つて
夜が明るまで賢婿もさうばかりねてござる間へも安堵して　半「おのうづ
安堵するほどもしろ大切な親が安心し絶え間なくつゞくなへ悪
縁といふものさ　条「其の事ばかり心よくと案じるとさうふ
起　半「そうさもそうろへ何もかも其時くのことにしろ　条「マア空
いろ／＼お母様の事へト半二郎が手をとれば横に倒れて月の手の
赤く成りいるあわれさ　半「まさうのこと親おまへが身の覚悟をさ
まだいつだしも　条「アレサそんなお前へ替へおのづくマアお前やくお様

とおまへ「もう夜が明けるだろう　条「ナニまだ夜の明けるに
未だ間が有ります　半「どうしても時が気になるものの　条「イヱそれ
でも今お前へが行せるとすぐに七ッの鐘が鳴るまで待てから
まだ夜ハ明けませぬヨ　半「時の鐘まで聞かせる正午時分ハお浚
を見すまして来ましたる　条「アレまたそんなことを聞いて離れ難い斯
うなるお母も此世の事を出さぬ心では定めてお母様へ　半「日
ごろに似合ぬ今夜の様子トおつかが顔を見つめてもまた顔を
隠しまゝ見つめる事半二郎ハまりうつむ　半「そでかいそう

ぶ堪忍しなトまてもなくべし枕とまくら夢の浮世にかさ
夢結むすぶ縁よしの糸すぢやなところび初し恋衣 肌も夢を
わすれた夢の汗ととありけるを後のはい初しもど今は二人も縁し
烏の鳴つらる暁をけさくちぎりけり



# 玉兎三の巻 一名 なぞくへかえん

江戸 狂訓亭主人著

## 第五回

商人の「道中双六宝船〳〵 豊年双六宝船お宝〳〵
条「一寸人きん〳〵 丹「アイとのふの小せへしなゐ何だ 条「アノ宝
舟紙ハお買なさい 丹「まだいゝさうも素気ハなゐ 条「それでも今の人道
中双六ののくの紙ものつくなるものの紙 丹「なんのこそんなことざろうと
おのくさ道中双六なら大略目子半さんがなんくにきるとの事て

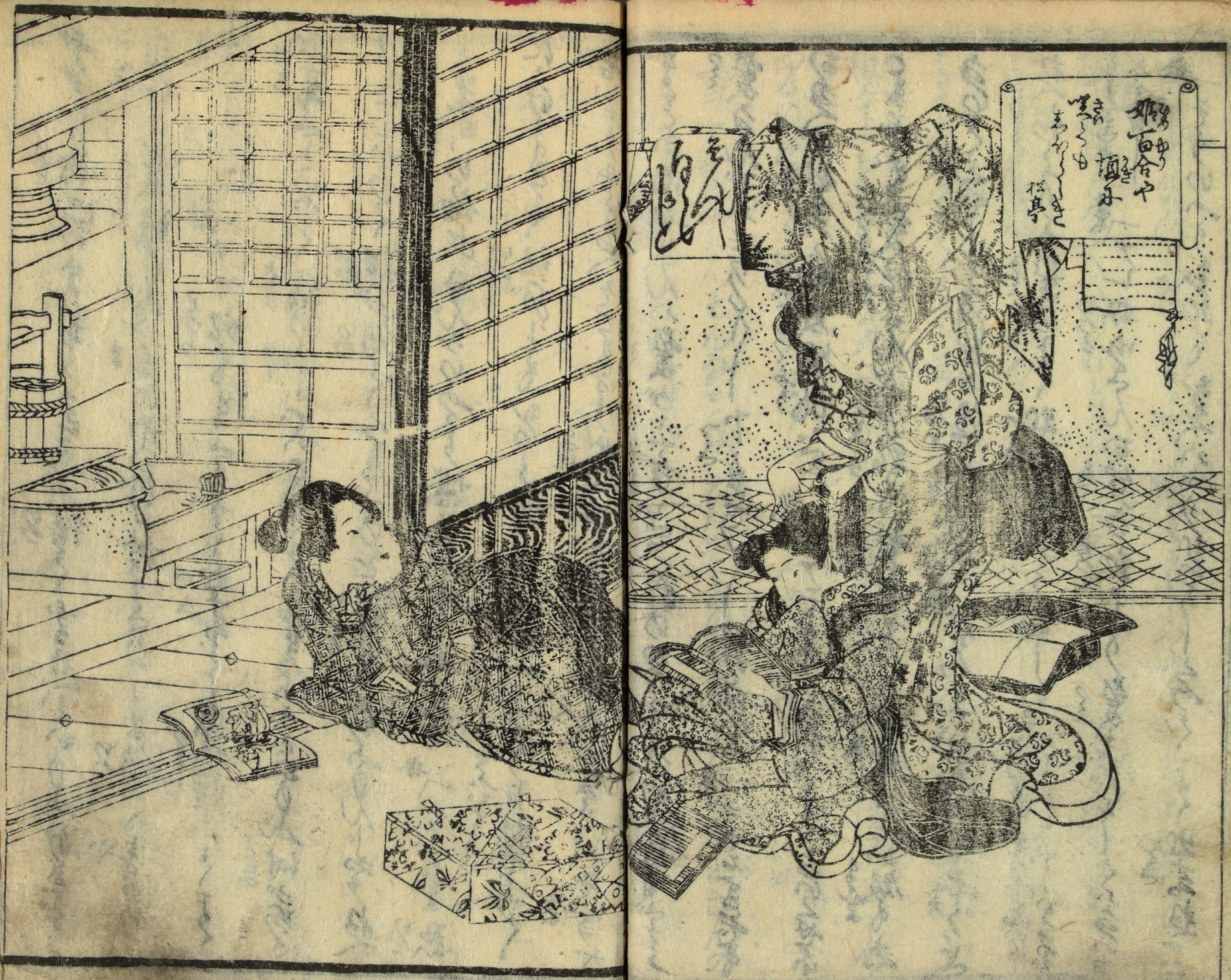
ゆるく来さのがあるヨ　条「ヨヤそうさ　私やアさつぱり知らなかつた
何処にある又　母「マア今でなくつくもいくじやアないか後の
ことにしなナ　条「アヽ出来るくおくのだ又子　母「幼年児で不知からうし
幾歳になつてもそんなことをよりいうく済むもので年々はホイ
来年でなるとまだ今年ご当年のう嫁まいりなければ
ならぬないのよそんなことですむか　条「否お母人ご子へお正月などは
いかのにそんな不吉なことを鉄おもひてないヨ　母「ヨヤく　此子は娘
こなどもうたくさんだ嫁に幾つの目出たいのだナなぜ　そこらが

不吉なことだ　条「いやく何処も幾つの八百私は死ぬまでかまはぬ
と二人で居るヨ　母「ヤ気楽なことをいふなぞそれよりはまあくそうして
あらくまるものか第一親が安堵しませんハ　条「ヨヤく　お母人さん
今日はお正月二日どのように小言をおいひなさるのでいやだよ　母「ナニサ尓
言ハないなおまへがいつまでも子供の気でゐるから苦労だと
いふことサ　トいふところへ近所の娘子供五六人　○「お条さんはエ　一寸
きんなでおあがりな　○「ヨヤく　宅においでだ子　頼ちはおあそびなさい
「さけまとどおし八丈くさ米町の網さん処へいろくさまつくお出

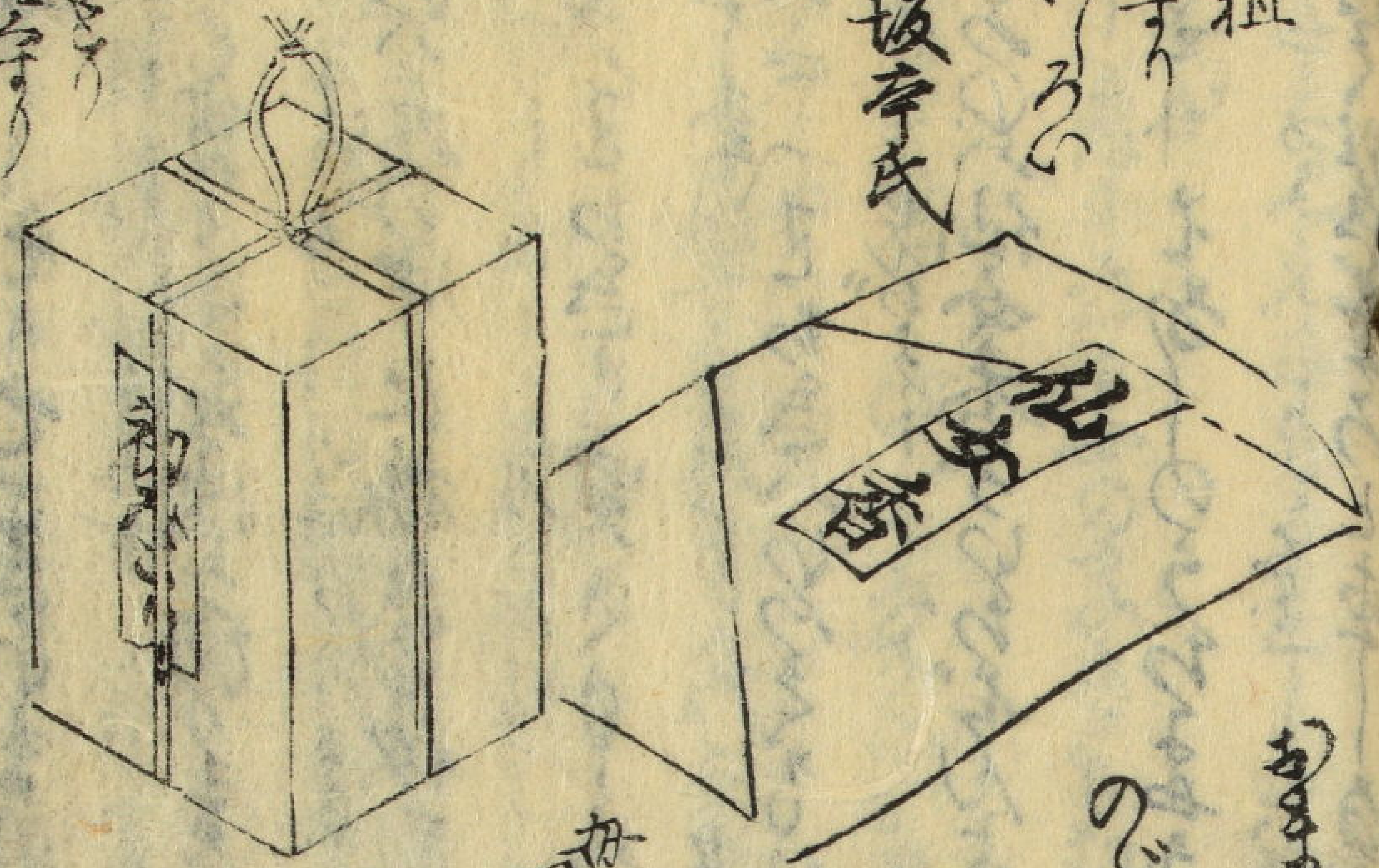
じやア女の子といふものはみんなにそういぢらしくまゐつては女の子どもいちじるしく
糸「おつかさん表へはいつぞお天気がよいから遊頭振をしてく
れさんなじやアないか　糸「おつかさんお門と外へ出てもよいかへ　母「よい
けれどもマア髪を結てからのことになさいナ　糸「アイそんならお母
さんへのうお門よしておせなお　母「それよりかさんなが家内へそい
つくおあそびでないかそのうち直に髪を結て遣よ　子ども「アイそんな
じやアさんながそうおしかトどうぞ家内へ入りながらもさすが
娘のなりともしとやかにやさしくおとなしやかに手習清経へかよふ

母「サアサアお糸さん火のそばへ来てあたりなサアお夏さんは秋
さんお冬さんみんなが火鉢の側へお出な　糸「今私が髪を結ふ
うち甚句でも双六でもしてお遊びな母人さん其双六を
出してお呉な　母「ムウリお友達衆遊びとおのおのよくよく気が
付くの　糸「アレサそうじやア有ねへ　母「そうでないから仕舞がざろう
何かと髪ハ浅目にするが　糸「そればかりもお母へその髪ハ大分目が
結てからまたまでに　母「お手によく出来ていやアねへ少しさし
ころくできて手にいかざるを見てゐるなかろうがよ
かくはひなりかたもまがつてひざしくわるうきなが　糸「おつかアお母へまたモツ

意地(いぢ)があるのヨおめへがよく結(いつ)てくれるとおのづからいろ〳〵
機嫌(きげん)がよくなつてそのひとつもこゝろざしとおもしろく結(いつ)てくれるんだが
とかくも下手(へた)くそハおかしくてすくなく髷(こけ)をひつつめ
ることばかり言(いふ)くせに話(はなし)も跡(あと)も無理(むり)に押(おし)付(つけ)だものだから一刻(いつこく)な
根(ね)がよくわからず子そだてが悪(わる)く出来(でき)て私が泣(なき)出(だし)て
顔のみえるくらゐさ これハ置(おい)てくんなましヨ 女(をんな)どちの噂(うはさ)ばなし
夏「ヲヤお冬(ふゆ)さんきつい事を言(いひ)なさるのでおいらもおかしい 爰(とこ)の母(おつか)さんの
若(わか)い時(き)のハ髪(かみ)の上手(じやうず)ぞみなおかみさんハおいらコエへお秋(あき)さん 秋「ア、
まことにお袋(ふくろ)さんハ髪(かみ)が上手(じやうず)だヨ私のおふくろハ田舎者(いなかもの)だから
髪(かみ)なんぞハモウ〳〵下手(へた)でいけねへハ 冬「ヲヤそれでも
おめへの髪(かみ)ハ何時(いつ)でも当風(いまふう)だネ 秋「ナアニよつぽどおめへハヨよくおめへの気(き)にいる
ことばかり髪結(かみゆひ)さんだヨ私も髪(かみ)がよく出来(でき)るとお飯(まんま)も
おのづとやしく泣(なき)たくなるハ 夏「おんなじことだねへおそうど
ねへ何(なに)よりか髪(かみ)のよく出来(でき)たときハうれしいヨ
冬「アレ母(おつか)さんお帰(かへ)りか 私(わたし)ぞうり髪(かみ)がむづかしくハおめへハヨ
母「そういふわけだけれども髪(かみ)ハモウむづかしくよく出来(でき)ねへと


娘百合や
松亭

おりく「他人(ひと)の子ならなをさら結(ゆ)ハせるがよいとおもひましたけれども
自由(じゆう)に髪結(かみゆひ)さんハあたにあそびで諸方(しよ)へまで結(ゆ)ひにまいりますのが
物好(ものずき)のゆゑ 条「ヲヤ私(わたし)もまことにさうで出来(でき)ぬものでも我慢(がまん)してよく
出来(でき)るといふ様の中(なか)で云(いひ)ましても妻(つま)のうちおやの附(つき)が有(ある)時(とき)
けれどもせつかく親(おや)が結(ゆ)ハせてくれるのを善悪(よしあし)をいふのもなんだかおいやなら
と米町(ともまち)の留女(とめ)さんがいかにも嬉(うれ)しがつて居(ゐ)る子 母「そんな事なら
にやつてやらう 結(ゆ)ハずともよいのだと言ふて娘の今日(けふ)ハ髪結で居(ゐ)る
結(ゆ)はせて下さいぞこれから先へおまへに結(ゆ)ハせるといはれたぞ 条「ヲヤ




おまへ娘どもが立ち寄つてかんにそうござるさ
のぞいてかんがへしておやりなすッとし
年(き)の毒(どく)そうな顔(かほ)をするおくさ
さんの気(け)ハまことにきつういゝ娘へ
母「ナニ このくらゐの気(け)もよくハ有(ある)まい子
よくまつ此の八雪の世へさとまおまへ
このもしい娘(こ)がおつけ(付)ひとりでにふけう
ときどき髪(かみ)の結(ゆ)やうがきまいになるヨ

夏「ヲヤ〳〵そうでございましたかどうりでこそ売る沢山でございました
条「アノ方々に取次がありましたヨ○初みどりといふ看板が出て居る
ますそれハ丸の中に梅枝の紋所が書てあつて脇にありますハ子へ　秋「それ
じやアモちつとも買ひにやらないかへ　夏「イヽエお袋さんおしろいハ何処のを
お買ひだ　条「私ちやアいつでも仙女香を買ひにやりますヨどうしても
おしろいハ仙女香がいちばんよいと思ひます　秋「今じやア大繁昌仙女香
ご子さへ　ト　きかしのうちに毎日しと髪を結ひますへバお茶をすませ
中川て髪をとかしと盛しあげ芝居の役者の顔見世もよく〳〵よく

出すやうと聞えさもうまし此おもしろさやうく座中双六をはじめし
く車座になる女の子さしも四人まじる春がそびハお夏お秋に
お条まで仲のよいお霜やお雪も白き襟をかけ八
手を並し居ずまひも気を揃へまでしく真白な
御代のうまれしは座数よる都鳥や五十四まり小三の桜
湖清く咲る花の都娘ざかりの旅立重の上の座中に
遠近風情振出しかくまで茂りしまゝ
どもかのひく〳〵の双六の

半「ハイ
下向よりさゞめき拵がそのとやら　鹿子町なる半二郎
母親お月出て子　条「ヲヤ伯父さんが出る母や半さんが　母「ハイく
今宵そて詞へ行ヨお飯の火を引うけてゐる詞どマアお前でもお
けるヨ　半「ナニく　茶ハおまえが汲で呑むからうまへにも抱びかく
ドいひながら飯後をりたそのあまりかゞし　大かうろへつまゝるを
だく　半「おつとそれ〳〵めざくなるところとおのつく　原平双六に入
のの手をまあさサアく　お条やさんあすかさく　吉んなかいても
伸るあまゐのめり　秋夏「アく　伯父さんもおまへりお子へお条さん　条「アく
ナニ半さんハとふりハしあいぶろうヨ　夏「良ヘそまどやア伯父
さんの分を払つ振て上やう　秋「アそうしてかあげか半さん
じやアあい伯父さんがお夏の分をお夏さんが振つて上ると　半「ドレく
お夏さんまけたらじやアおやぢヨりしまけると文にあるのでを　秋「
ヨやくしかお夏さんうまくくろうね　夏「アくうまくいつてあゐと云て
たのしくゐる○当世振子どもの洒落てちやほやするも年増
もおよぶはなつまどもやらしいのがうへしてさまどもお条ハ
半二郎ひとつのまく　中であるこの河内親ハ勝手次第より出生

母「ハイまアおめでたうござりまする　半「ハイおめでたう　このときかみゆいハかへりて見えず
粂「まアじつにおまへさんそんなことをいふとおかしいねへ　ヨホヽヽ　母「まアまアこ
ちらはまアこの何のおかしくもねへことを笑ひだすとがあるものか　半笑ふ
門には福来るといふから泣よりいいはな　母「お前もそんなに泣まら
ねへで笑ひなさい　十二まで笑ふと泣と一ツになるものか子　半「そうさ
ども泣笑ひとはおめでたいものさ　母「お前がそんなにいふ
ならおきのせぶろうがお粂がやかましいぞ　おりましたら　しかる様子
…いけるの子　半「イヤこのつハとんだ尻をくらふものでござりやす　母「イヽエ
まアひごろおつやアるいハヨ今も髪結のことで咄の六ヶ敷さ　粂「
ヨヤ母人さんうそをおつきなさい今見りやんとこまよく出来てる
うまし　わたしがぶつて居るにやア子　夏「サアおかみさん御自分の商ごヨ
粂「ヨヤそうかへヨヤ　そうさ三ツいけるいね　お霜さん笑ふ
やかましい事何処に居るのへ　秋「お前にハまア蔵沢にいつて
ごヨ　夏「お前ハ才にあまりすぎるものの　致ますつてもきうし
いつまでもこの子半さんの私ぶつてあげるのにさうすりや　らち
明るのさ　トこゝまでのりたり　ずんずんにありあがつて

度も寝よと志る所し　秋へヨヤく　今夜こそ契ハまたに後手
おまてこ姐へ　夏へちよつと曲続お条さんと半さんの八幡川から
こゝまでく来るのハなんぼくも同じ数になつて一ッ所よあるハアく
ねへ　私も今さういふとおまへさん知じ　ヘサアお雪さん　またく
おふりヨ　半へおやきさんが裏に宮てくも降てハこまる世　条へエレサ
そんなこと張るのごとある遠がヨじ来てくおいでおねへ　サアおきッ
といえやく　およこしヨヤく　またニッく　夏へサア半さんの分
ヨヨヨやや開ねりニッハおち秋さんがる開てくあけゝくハおかさ　秋へアイコニッ

くひイ来う　夏へかゑくにとも今おまへさんの書てさ知じ　ハ子　秋へヨヤ
そうござ居ます　石部とヨヤくし　お条さんも半さんもまた一ッ所よ
お泊りぢヨトいへおお夏ハ十七ばかりの也年でありませ如丈
なけきまで　お条のひきをあよるのと法く　条へアレお夏さん何をおしご
トおとなしう母親のて段アる要守にもうけぬ極めまで掛る
袖くそんど十二年も何くるぬ数お条ハ立待姥捨の細にあさ
良ぞ　りんのりと何てむ良のうつくしく雪より白き装えも
あるぶや梅の花娘おちやッぴイありがてんたも果和もその

あそびあそばして　秋〽サアまア遅くおそくなつたから　夏〽アヽおかしいこと
伯母さんありがたふ　母〽ヲヤのふこんなおもりかまへ生薬を読む
く　お急ぎヨ伯父さんもさあそうをするから　秋〽ハイありがたふ伯父さんハイ
さやうなら　冬〽ヲヤ〳〵一昨年よりいろ〳〵あるのう　夏〽十三年目ハ
冬〽お婆さんやおばさんがお急ぎでいらつしやいよ私さんのお宅へまゐると
今ハ父御さんもおかみさんも居なくなつてしまつて一人でおいで
寒なし〽そればかりはしかたがないが　夏〽イヽエどう
ぞ機嫌よくお達者でとことばかりマアよろしくまをしてくださいとちひさくなつて

なく　ひきあげた雨ふ日はあらし引さ隠居さんと　友〽ハイ明ましておめでとう　條
分　めでたいむすこにおまへがたの身八友とよが
まづ　條〽ヲヤおかんとうのか礼着のおからかつた隠居さんおさ子
サアおとりおかみさん隠居さんの方お礼に来さヨ切山椒の餅を
て　よにのつく喰のから　母〽まアそんなことを致しませうそうして友さんと
こないだ　條〽そればかり寅さんのことおしへなさいまし名の通
いふおち　清村の若且那はうつかりどうもあんまりうつかりおいでのふ紙
おのへ那へおの姉さんとそのおふくろさんのお手がやけてうるさいヘ
通つて友さんとみえるといふことかいゝ人があるもの紙下附録第二編ハ

おくより出来り 半「イヤア隠居さんサアおくへお出なさるがいゝと
ようやくお出なされたよ 友「ヲヤ半さん何ぞうまいものがあるのさ
のゝ 京「アレ皆のきいた顔ばかり小格子の銭はないよヨト
友「アレどうもきいた事へ御免やアー殺へトキニ半さん
早く来まして何だ字 半「エ何サ今度中双六でもこさへ
ひまでなさるで宿屋の若旦那ちやうどいゝときサ 京「何ぞ
趣向はないか 友「半さんの洒落でやア損料ざトいふ時しも
八百屋「山のかわく／＼陰居のもの大安心よろしう

## 第六回

初年や山の奥にも涙の雨 幸「ヤレ／＼何処の裏も縁やうなもの
ご意見にも大かんどうも細工のもの仕掛のもの似たもの
一番よりいゝのさ 久「何もかもいらぬ隠居世の中ご無事天照皇太神
神宮さまの時から今までまでの節の世の中太平のもの
当時の世界で織るやうな事とのみ時分の不思議
世ト云ふ事の名人連れて継のもの二番と
同商売片岡屋幸左衛門中継の八左衛門市で初年の

夜も更ぬればかくて小風呂敷を背中に鍬の錆鑓眼一天狗
倒しや杉の森の地獄に縁きし川柳を読ながら「おふくろが針
よく娘等くあり」「江の島を見て来る娘自慢さし」「イヤ
娘が思ひ出しが何と幸さんは智恵ふある者へ 幸「数ゝ
情に娘が智恵と云ふあんのことさ「イヤ外で入るがさる お大名
十五六から十七八までの娘をさがしてあるがどうもいく
のが是まさ在さ姫が何かと云ふ縁の若い娘も其へのんさ 幸「何さ
いゝなとかりぐ妾の口入のそりやア出入の口入所が如才があるか

ものかまさ大名が娘をさがして妾とゐふことがあるものか「イヤく
そうでねへ ヨヨ已支度金銀あまく妾に往といふのがいくらも
あるが命を殺さし出して往といふものゝ取なへどやら極さ 幸「命
を取と治領分の人身御供に殺し疱瘡の薬にするところく
娘の生血がいくもいるのか 幸「ナニサ 縁本のすゝや武者修行の
ものしおやりあるまへしそんみ上げてへ奴へがその殿さまか 幸「何
削の原続の子孫でもくもいゝのか 幸「ナアニ それでも殺て
こびきとうてへとうしことのだ 幸「イヤおまへも今まで病気の

痲疹とうつくしいにおまへの 幸「疱瘡手に流行のするのと

いふことがあるものか 〽イヤそうそう遊へぜむし 砂糖のすく夏時

金のやり歯を顔らふものが少なく見えるまま芋が流行卯き

ろ小児の杵の雲がすくなくなってとの色 幸「それやもう ますの

ことあるへのきあし八半分でろから艶へまでるからさるもすまろ

いよへそうつくその娘へ迄ろし 〽工 娘ろ逝く新まで子へそうど

何処から国金へ 〽くも約束しろう 幸「それやう何処のきおしと 〽に鄙らが

向ふの舟や宅のことヨ 幸「それ見たことか つまらぬ遊へ てそく人を

あそびに身がおち大名のきおし 〽種あしう 〽大く種あし 〽大

担へ芸まの態の粗ご 幸「まるく 㒵まうけ 〽 㒵まうけ

のきまた芸門ありと 奥様さるせ娘の氏の人いろもあるせ 〽そう

うそまた年より ごまぶあろ [illegible] 大勘のきおしど その

お屋敷への大騒乗さまの次分細く騒乗年次 [illegible] の

しぶ出郷竈の源左さまの出組屋さまに子をもろの 御前に

幸 性の娘風がりを込ぐ すこし 幸が乱まく ござるとのきおし

でまるに似寄の娘ぢやく [illegible] 二三人如しが不職

大病にかゝり死ざりしかバいのち金がありしと親達が思ひくらす

お妾にかゝると二ヶ月八續のうちとハなり奉公するものもなし今

あまたの女中もそろへしひとの娘をもらひうけ召仕がある

延命寺のまへ羽根娘つれてふと娘が手習によく似ておる

そもそもよりもふかうしたものふたりがそれま娘殿にうつかへおもうから

御覧じて遠く上ろとおもひそれゆへその娘の親が何処の

出入ぜし薬もそのやうし娘のもとへ娘ききとくめして居るうち

娘の命娘金ある家にぞくうしくも桂まきすゝめのかと一なんぞ

衛門といふ者ありしがまへにやしなひてハその娘殿をさせ産ませと

思ひ出しておもひ立りしが殺人と気をつけて責てとめられるものてござる

に延命寺家の大殿が五郎次男と郎秋義ぞく平次が引とりて

娘殿も手出しにそのもとびとそこできたるものてござる延命

寶への外に延命寺家のうちかくれびといふ何とぞうまくいけし

その娘に知りつれる妻への幸へハテナそのうち一幕迎へて落ぶれ

てへの子く地かげ通りの娘ざくうかく歩行してうつかり

女大臣ぐ一盃やくわそうか やへよろかく一合呑やらいて替家が

出めへとも足を遠くしより酒屋へちよりちよりと酒のだん〳〵まで
何よりたのしみだ二人ハ看板から客様をのせて夏中に夏 幸「キニ
がうさん今の娘ハ仲居の中ニ千郎が親類ぐらしの中ニ三年〆が
あいがるお家とのお娘かやアね其めに知らん 仁「ハテ子何でも杜若のお
茶屋とある風の娘ぐ宅ハ紙や筆紙売る吉田屋とやらの家名ぐらいけ
幸「あぐひあしく此の娘なら大名のお目にもとまりそうなもの
ど 仁「やへそんなら其の娘親の家が遠ふして屋敷へ出ルふりしてよ
あるかハ 幸「ずねるぐん何るが世話役も賞金も半分ぐ遊 仁「そりやア
知れたことだおれ一その人ゆへしれる金がいるぜ 仁「ちとしてアえまさまも八
合点でごアアどうしても有るぞ 幸「さまバサぶよらばく嘉平と云ふやうな
すみてもお客ハ出来ねへ金やって出入ぐ家様の娘様押えて差とく建
合もかう手当も重役弟と様ぐしつけりやア是非ゑく様新とある理
どふしてもやらう有めへの 仁「あるねをうまてお出ぐいげが屋敷からの気ぐく
ともつけるが一旦参って提おる旦ハ出もあるへせ 幸「知を出させるよ
殿が何の御用彼娘ハ清元の浄るりがうまく語るから第二の方へ云
通ふく武家や町家でも立流お座敷をも六軒と出てる出来そこ

親義が出ても男へともまだ惜ござらぬ半二に渡しやる又
嫁にする一の家じやが忠五郎が入りより先へ少しの親義もござらぬ八十一歳
で当親義へ御家来で上あづくとしらく半二に渡しやあの男も親
の前へいくらかいがる娘のとおり着物のとしまでも負けのしござる
自然と出来を幸にとり女房へ弟をとりかくしてそまだしやうらまくいふ〳〵
ござらくしらげん親分は例の捉ハ家へつまく行くときを
いろく物がら忠兵衛がも町人が娘芸者奴つまく遠かると御
家老が薬妹しお後へかの広家へ女中の宿かり姉娘の母
親が違ひに継しいの陰で、お奥へ出ておらぬとゆへ、半二が女
房にはつまらぬ也やれど、あの半二でさへ掛合家の屋敷も
嘘も知らぬ居るかし、幸が添ひとはけやせん。それ女房ども
何の御難のおやしきでも知らずに娘を連れまして奥へ通りをとどく
浄るりのお好みでも、茶屋歌で、上句に彼殿さまが是
非ともつしやると娘へこの半分で相談が出来ますナ 乳「
明も楠もいつか後へ妙尼しく 幸「そんなら半二は見まだ会
ともかく男に屋敷をそのまま手に出しいたし 乳「御家中の

男のわらひが何彩を畫せう子 幸「そりやうまへが藍じねえでハあらう 女ハなぜ「そうサ子トいふ柳しも雲の柏子木 カチ／＼カカチ

光濤新話 玉兎三の巻 終

江戸 狂訓亭 為永春水著

香蝶樓 歌川國貞画

玉うさぎ 三編 四編 各全三冊

草稿出来あり候 追々彫刻より 出し申候

大坂

[illegible]

大坂 [illegible]